



【講演概要】

男女共同参画とワーク・ライフ・バランス

宮井 千恵 理事

(ワークライフバランス担当)



私は徳島県の出身です。徳島大学附属病院で看護師として9年間働きました。新卒で入った小児科では、家族の大事さを知ることができました。時間があればベッドサイドで子供と関わり、こどもから信頼を得ると家族からの信頼につながることを体験できました。そして、多くの子供の回復と死に対面したことで、自分の看護観・人生観とは、誠意を持って全てに対応することだという柱ができました。

私が心がけてきたことは、前向きに考えて嫌なことから逃げないこと、また、他人を不快にさせないことです。相手が傷つくマイナスの言葉はできるだけ使わずに、どんな時でも明るくいることはとても大切なことです。看護職は人の命を対象とする仕事であり、人と人の関係性が大事な仕事です。

その後高知医科大学附属病院に移り、小児科を担当後に看護部長、副院長を務め、退職後の現在は、看護協会会長を務めて6年目になります。前任地で管理者のマネジメントによって、人のやる気が全く変わることを実感しました。部署の長としてどのように皆がまとまるかを考えて、自分の思い描く看護師を育てていきたいと思って高知に来ました。看護職には男性看護師もいますので、男女共同参画は当たり前で、あまり意識しませんでした。専門職であることと緊急事態が生じる現場で勤務時間内にいかに仕事を終え、ワーク・ライフ・バランスをとっていくかを永遠の課題と思い葛藤してきました。看護師としては、良い看護をしたい、仕事を終えても患者の状態も気になる、もっと勉強しないといけないわけ。他方、管理者としては仕事を辞める人が出ずに、時間内に帰れるようにしたい、休暇を取らせてあげたいが、人は足りない。ワーク・ライフ・バランスについて、何十年も戦ってきたと振り返って思っています。

ワーク・ライフ・バランスとは時間外勤務をなくして、仕事を早く終わるということだけではありません。やりがいをもって仕事と生活の調和をとるには個人差があります。大事なことは一人ひとりがどのようなことによって、やりがいを感じるかです。自分自身の生活の豊かさと人間としての幅を広げるという意味で、「自分の必要な時間が確保できていく社会、そして多様な生き方が選択できる社会を目指していきましょう」ということがワーク・ライフ・バランスの考え方です。

個人としては、マズローの欲求段階説にあるように、自己実現のためには、自分の目標に向かって、自らの健康に気をつけ、安全を確保し、他者から信頼され、承認されるよう努力を重ねていくことが大事です。目標を達成するためには時間もかかるので、順に自己実現へと向かっていく生き方をしていけないと思います。

組織の管理者としては、ワーク・ライフ・バランスは経営戦略と捉えて、ワーク・ライフ・バランスの実現によって人材育成や質の向上、良い人材の定着など好循環につなげていきたいと思っています。

(平成30年9月22日開催、高知大学男女共同参画推進室講演会)



●ロールモデル講演会 「国際経験を活かしてキャリアを組立てる」

平成30年6月11日、香美市で「牧工房」を主宰する内田牧子さんを講師に招き、フィリピンで青年海外協力隊として活動した経験を踏まえて、キャリアの組み立てについて講演いただきました。参加者は142人でした。内田さんは自身も波瀾万丈と評するキャリアを経験し、現在は高知県を拠点にオーガニックのスキンケア商品、ペット用の海藻シャンプーなどを製造販売しています。フィリピン時代には陶芸指導員ながら、しいたけ栽培、竹細工作り、マホガニー林の管理など村の為なら何でも取り組みました。帰国後も国内外で様々なビジネスに挑みました。ある時、体調を崩していた内田さんは、オーガニック素材で作ったシャンプーを使うと髪の毛や皮膚の調子が良いことを実感し、アートと健康を合わせたオーガニック商品の製造・販売を始めようと思い立つなり、その足ですぐにスリランカ、インドに飛び伝統的な健康について学びました。今は、この仕事との出会いのためにこれまでの経験があったと思うほど「これだ」と感じる仕事についていると実感するそうです。参加者からは、波瀾万丈だけれど、自分のやりたいことに正直に向き合い、それを実現させる行動力がすごいとの感想が多々寄せられました。



●ロールモデル講演会 「ボリビアの人々との出会いから～手仕事の場づくりをはじめて～」

平成30年5月30日、高知市土佐山で「桑と茜」を主宰する福田わかなさんを講師に招き、ボリビア多民族国家で青年海外協力隊員として活動した経験を踏まえて、キャリアの組み立てについて講演いただきました。142人の参加がありました。福田さんは大学卒業後、民間企業に就職、そして28歳の時に英国の大学院に進学しました。その経歴からは英語が得意と思われるがちですが、実は留学中も帰国してからも英語への苦手意識はなくなり、大学院の時には日常の課題にも苦労させられたそうです。その後、福田さんは、ボリビアで青年海外協力隊の活動に従事しました。初めてのスペイン語にワクワクしたそうです。やがて、外国の人々や暮らしに触れて、日本人である自分に意識が向くようになりました。そして、日本で自分が幸せを感じるシゴトをして、そのことを通じて、誰かの役に立ちたいと考えた結果、自分も周りも楽しくなる「手仕事」に辿りつきました。色々な土地文化、そして多様な人に触れ、他者と交わることで自分が相対化され、自由を得たと福田さんは話します。以前とは違った方法で国際協力に関わりたい気持ちもあるととても意欲的でした。



若者の過労死問題を考える講演会

平成30年7月24日、愛媛大学長井偉訓名誉教授を講師に招き、過労死等防止対策等労働条件に関する啓発授業『若者の過労死問題を考える～「過労死をゼロにし、健康で充実して働き続けることのできる社会」の実現を目指して』を開催しました。人文社会科学部の中川香代教授の趣旨説明の後、勤務問題が原因でご子を無くされたご遺族でつくる「四国過労死等を考える家族の会」代表による過労死問題の事例が紹介されました。長井先生からは、過労死の定義、労災認定基準の説明に加えて、若者の過労死・過労自死の論点として、日本企業の労働慣習、顧客ファーストの経営、過剰なサービスを求める消費者、自分探しや勤労観中心のキャリア教育の課題が紹介されました。最後に、これから就活を始める学生に対して、自分が志望する会社がどれだけ「ヒト」を大切にしているか。また自分のやりたいことだけを基準にせず、自分に何ができるか、何をすべきかについて考えることの大切さが伝えられました。講演後には人文社会科学部棟の演習室で座談会が開催されました。座談会に参加した就職を控えた学生からは講師やご遺族の方に、就職するにあたって感じている不安などについて質問がありました。



男女共同参画支援ステーションからのお知らせ

男女共同参画支援ステーションでは、女性研究者への研究活動支援、相談業務等を実施し、女性研究者の支援に関する業務を行っています。相談コーナーでは、仕事と育児・介護の両立相談、研究職キャリア相談を受け付けております。

●第9回ワーク・ライフ・バランス講座 育児と介護制度の説明会を開催しました

男女共同参画推進室 男女共同参画支援ステーションでは第9回ワーク・ライフ・バランス講座として、平成30年度「育児と介護制度の説明会」を開催しました。安全・安心機構の小島優子准教授が、高知大学における育児・介護休暇制度を説明しました。農林海洋科学部では5月15日、教育学部では6月13日、医学部では6月19日、理工学部では7月11日に開催しました。

教員は教育や研究、学務、生活や家事がある中で、それぞれの仕事を総合的に充実させるためのワーク・ライフ・バランスを提案しました。育児休業や介護休業の取得、仕事と家庭の両立についての相談は、男女共同参画推進室で受け付けていることをお知らせして、働きやすい職場環境づくりに役立てました。



●オープンキャンパスで「男女共同参画でかがやく☆未来コーナー」を展示しました

男女共同参画支援ステーションでは、女性研究者の裾野拡大に取り組んでいます。平成30年8月4日・5日に、総合研究棟1階ディスプレイホールで「男女共同参画できらめく☆未来コーナー」を開設しました。高校生たちは、高知大学の女性研究者のキャリアと研究内容についてのパネル展示に関心を持って眺めていました。



オープンキャンパスで学内託児室を設置しました

男女共同参画支援ステーションでは、平成30年8月4日・5日のオープンキャンパスで託児を実施しました。オープンキャンパス業務に従事する女性教員1名の利用があり、学内教職員の育児と仕事の両立に役立ちました。



●女性活躍推進のためのセミナー

「自分らしいリーダーシップの磨き方、磨かせ方」

平成31年2月4日に高田朝子氏（法政大学大学院イノベーション・マネジメント研究科教授）を招いて、女性活躍推進のためのセミナーを開催しました。開催挨拶は宮井千恵理事（ワークライフバランス担当）が行い、本学の男女共同参画の取組について紹介しました。講師の高田朝子氏から、女性を取り巻く問題や、女性が管理職になる前に知っておく必要があることを学びました。

女性がリーダーシップを築くには、男性の規範に近づくのではなく、自分らしいリーダーシップを磨くことが大事であることが伝えられました。女性は自己主張しないという「しなやか幻想」や、「女性は男性の倍働かなければならない」という呪縛に捉えられています。上司が言葉で方向性を与えることが大事であり、一言で女性が救われることが伝えられました。セミナー参加者は、女性がリーダーシップをとるために、おかれている状況や問題点、仕事の進め方について考えることができました。



文部科学省人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(牽引型)」 「四国発信!ダイバーシティ研究環境調和推進プロジェクト」

四国地域の問題・課題解決につながる研究から、世界の人々への貢献に発展する研究を目指し、四国地域の産官学9機関が連携して、女性研究者や若手研究者の挑戦の場を広げるとともに、女性研究者の裾野拡大や若手研究者の育成、研究者のライフイベント及びワーク・ライフ・バランスに配慮し、女性研究者のマンパワーを質的量的に増加させ、男性を巻き込んだ総合的なキャリアマネジメントに向けて、「四国発信!ダイバーシティ研究環境調和推進プロジェクト」を展開します。

- 代表機関 徳島大学
- 共同実施機関 香川大学・愛媛大学・高知大学・鳴門教育大学・徳島県立工業技術センター・徳島県立農業水産総合技術支援センター・アオイ電子株式会社・協和株式会社
- 補助事業期間6年間 (2018~2023年度)
- 目標 1 研究力の向上、優れた研究成果の創出、女性研究者の活躍の場の拡大
- 目標 2 女性研究者の増加及び上位職への登用を推進
- 目標 3 研究と生活の調和を図る



行動計画

プロジェクト① 女性研究者が牽引する地域創生、イノベーションシーズの形成



- ① ダイバーシティ推進共同研究制度を構築し、女性研究者が牽引する地域創生イノベーションシーズを形成するための基盤整備を行う
- ② 研究費獲得から研究遂行に向けて挑戦するための支援を展開する
- ③ 女性研究者雇用の場の拡大をはかる
- ④ 共同顕彰制度により、研究へのモチベーションを高める

プロジェクト② ハイ・ポテンシャル人材育成

- ① 女性研究者の在職比率、採用比率をあげる
- ② 女性の上位職への積極的登用を推進する



高知大学 女性比率	全体(教員・研究員)				上位職(教授・准教授)			
	在職計画		採用計画		在職計画		登用計画	
	全体	うち自然 科学系	全体	うち自然 科学系	全体	うち自然 科学系	全体	うち自然 科学系
申請時 (2017年5月1日)	18.5%	17.0%	23.5%	21.4%	12.1%	7.9%	17.4%	11.1%
目標(2023年度)	19.6%	17.8%	27.5%	29.4%	14.4%	8.7%	14.3%	14.3%

- ③ 役員及び管理職への登用を推進する
- ④ 女性リーダーを育成する

プロジェクト③ 研究と生活の調和

- ① 各共同実施機関で取り組んでいるライフイベント及びワーク・ライフ・バランスに配慮した支援を展開する
- ② 四国デュアル・キャリア・システム(夫婦帯同制度)を構築する
- ③ キャリア形成実現・復帰・復職に向けた支援を展開する
- ④ 治療と仕事の両立支援を展開する



ダイバーシティ推進共同研究制度

本事業では、女性研究者が研究代表者となり取り組む共同研究に対して助成を行います。女性研究者のリーサーチマインドを高め、地域や社会の問題・課題解決につながる優れた研究成果の持続的創出をはかることを目的とします。

支援金額：50万円以内（平成30年度実績） 支援期間：2018年度～2020年度

以下の研究が採択されました

- 研究課題名：「コンプレキシンによる抗体分泌制御が全身性エリテマトーデスの病態進行抑制に果たす役割」
- 研究代表者：都留 英美 助教(高知大学教育研究部医療学系基礎医学部門)
- 共同研究者：田良島 典子 助教(徳島大学大学院医歯薬学研究部)
- 共同研究者：津田 雅之 准教授(高知大学教育研究部医療学系基礎医学部門)



ライフイベントからの復職支援制度

過去2年度以内(平成29年度以降)に、ライフイベント(妊娠、出産、育児、介護)のため、休業又は産前・産後休暇、もしくはその両方により、3か月以上やむを得ず研究活動を中断した方の研究を支援します。

支援金額：10万円以内（平成30年度実績）

以下の研究が採択されました

- 研究課題名：「脳性麻痺治療を目指した臍帯血移植による脳内微小環境の制御」
- 採 択 者：王 飛霏 助教(高知大学医学部先端医療学推進センター)

●ロールモデル講演会「女性・私・哲学」

平成31年1月24日に、ロールモデル講演会「女性・私・哲学」を開催しました。人文社会科学部「男女共同参画の哲学」受講生のほか、DCセミナー、黒潮圏セミナー指定科目として、大学院生等が参加しました。講師の木村恵子氏は、学生時代にミス・青山学院に選ばれた後、無理やり合コンに誘われたり知らない男性から電話がかかってくることによって、女性として対象化されることに傷ついたそうです。しかし授業でカント哲学を学び、人間性を単に手段として扱うことを禁止し、目的自体として扱うことを学び、自分を目的自体とみなして自ら考え行動するようになりました。このように考えると、哲学することは、自分の中に動機を持ち、自分が主体的に意志していくことと言えるでしょう。

大学卒業後に働いてお金をためた後、木村氏はカントを勉強するために子連れでドイツに語学留学し、その後、日本に帰ってきて大学院に入学しました。しかし、日本の哲学系の学会では女性がほとんどおらず、女性が日本で哲学を続けるのは厳しい環境にあることが分かりました。けれどもドイツでは多くの女性研究者が活躍していることから、ドイツの大学に半年間留学しました。そこでドイツ人の教授の下で博士論文を書かないかと誘われます。中学生の息子に「メジャーリーグに誘われたようなものだ」と言われて、単身でドイツ留学することになりました。木村氏は自身の個人的な経験から、聴講者一人一人が何か普遍的なものを感じ取って、日本人という枠を超えて男女が協力できるようになってほしいと講演を締めくくりました。



■英語論文執筆セミナーを開催しました

平成31年1月25日、ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブの事業の一環として、高知県立大学のHyeon Ju Lee先生を講師に招き、「院生・若手研究者のための英語論文執筆セミナー」を開催しました。はじめに、Lee先生より英語論文の執筆に当たって重要かつ基本的な内容について講義をいただき、続いて参加者が各自持ち寄った自筆の論文やAbstractをもとにLee先生よりコンサルテーションを受けました。学術の分野及び投稿するジャーナルによって、英語論文の作法は異なる部分もありますが、このセミナーでは、「英語論文」に求められる学術としての作法、礼儀正しい言葉づかい等について講義で確認しました。また、投稿する分野やジャーナルでは共通する構成や言葉遣いもあります。有名なジャーナルではテンプレートも入手できるので、自分が投稿するジャーナルについてよく知ることも大切です。大学によっては、学生が論文のコンサルテーションを受けることが出来るオフィスやスタッフを常設しているところもあるようです。本学でも、学生や若手教員が気軽にネイティブや英語論文に精通しているスタッフに意見を聞ける機会を増やしていけたら良いなと感じました。大学院生を中心に9名が参加しました。



共通教育科目「男女共同参画社会を考える」を実施しました

男女共同参画推進室は、共通教育科目「男女共同参画社会を考える」と共同で、男女共同参画社会に関する学生教育を行っています。授業のテーマは、「男女がともに生き生きする社会」「新しい時代の暮らし方と働き方」を考えることで、107人の学生が履修しました。

男女共同参画について、憲法やジェンダー論、家族論、哲学など多様な学問分野から学生は学ぶことができました。さらに、こうち男女共同参画センター「ソーレ」と共同で「キャリア形成セミナー」を開催して、高知で働くロールモデルの話聞いて学生が自分自身のキャリアについて考えました。また高知市健康増進課の協力により、「認知症サポーター養成講座」を開催して受講者にはサポーターの証となるオレンジリングが渡されました。

3日間の集中講義で、毎年盛りだくさんの内容の授業を展開しています。



9月21日

- 1限 オリエンテーションと男女共同参画の基本 小島 優子 安全・安心機構
- 2限 映像からみた男女共同参画 中川 香代 人文社会科学部
- 3限 高齢社会における男女共同参画 —認知症サポーター養成講座—
認知症のひとと家族の会高知県支部 小笠原 千加子 氏、高知市健康増進課 濱田 知加 氏
- 4限 家族から見た男女共同参画 森田 美佐 教育学部
- 5限 男女共同参画とジェンダーの考え方いろいろ 武藤 整司 人文社会科学部

9月22日

- 1限 大学のなかの男女共同参画 廣瀬 淳一 安全・安心機構
- 2限 育児から見た男女共同参画 岩佐 和幸 人文社会科学部
- 3限 男女共同参画とワーク・ライフ・バランス 宮井 千恵 理事(ワークライフバランス担当)
- 4限 デートDVについて考える こうち男女共同参画センター ソーレ
- 5限 憲法で学ぶ男女共同参画 藤本 富一 教育学部

9月23日

- 1限 キャリア形成セミナー 筒井 淳也 氏 立命館大学
- 2限 キャリア形成セミナー
ロールモデル：植田 恭平 氏 高知市役所生活食品課
川口 真穂 氏 漁師の食卓
東森 歩 氏
ファン度レイジング・マーケティング代表
- 司 会：筒井 淳也 氏 立命館大学
筒井 淳也 氏 立命館大学
小島 優子 安全・安心機構
- 3・4限 キャリア形成セミナー
- 5限 生殖医療と男女共同参画



●第11回ワーク・ライフ・バランス講座「認知症サポーター養成講座」を開催しました

平成30年9月21日に認知症サポーター養成講座を開催しました。認知症は誰でも起こりうる脳の病気で、65歳以上では1割ほどが認知症を患っているとされます。認知症サポーター制度は、厚生労働省が平成16年度に導入しました。この講座では、認知症の家族を介護された経験をうかがい、認知症とは何か、認知症の方へどのように対応すればよいのかについて学びました。受講者には、サポーターの証となる「オレンジリング」が渡されました。



受講者には、サポーターの証となる「オレンジリング」が渡されました。

デートDVセミナー

平成30年9月22日、男女共同参画推進室は、こうち男女共同参画センター「ソーレ」との共催で、「デートDVセミナー」を開催しました。講師は「ソーレ」の職員2名が務めました。参加者は59名でした。冒頭に「デートDVとは」と題して、デートDVに関する基礎知識について説明がありました。続いて、「同意と性暴力」に関して「性行為を紅茶に置き換えた」英国の動画が紹介されました。動画については「わかりやすい」「友達に紹介したい」といった意見がありました。次に、講義や動画を踏まえたワークショップとふりかえりが行われました。参加した学生からは「DVには相手を支配しようとする要素がある。人間を支配しようとする言動について敏感でありたい」、「女性目線の紹介が多かったのも、男性目線の説明があってもよい」、「男女共に起こることと言ってくれたことはよかった」等、真剣に問題に向き合ったことがうかがえる意見がありました。デートDVは自分や友だち、誰にでも起きうることであるものの、ということがデートDVに該当するかは講演会で初めて知ったという意見も多く寄せられました。大学としても同セミナーを継続して実施していくことの重要性を改めて感じました。



●男女共同参画推進室講演会「男女共同参画とワーク・ライフ・バランス」



平成30年9月22日に、高知大学宮井千恵理事(ワークライフバランス担当)による講演会を開催しました。講演内容につきましては、本誌の表紙をご覧ください。理事の講演を聴いた学生からは以下のような感想がありました。

- 「人手が足りず、看護師の中で、子どもができれば、おめでとうと言っていても実際のところは、また働き手が足りなくなる、と思っていたということが衝撃的でした。自己実現のためには、すぐに目標に向かって動き出すのではなくて、まずは、マズローの欲求段階説にあるよう、生理的欲求であるとか、安全欲求を満たす必要があることが分かった。」
- 「一人一人が組織の中で組織がどのような社会的役割を担っているのかを考えた上で働くことが必要だと思いました。また、働き方は人それぞれであるべきであり、ワーク・ライフ・バランスについて組織として考え制度施策を設置し、それを推進する風土をつくることが重要だと考えました。これからますます女性にとっても働き続けやすい環境ができあがってくるのだと思います。私も自ら考え行動を起こしていこうと思います。」

■男女共同参画のキャリアデザイン

平成30年9月23日の1～4限は、こうち男女共同参画センター「ソーレ」と共催し、キャリアセミナーを開催しました。1限は、筒井淳也氏(立命館大学産業社会学部教授)による講演「仕事と家族 これからのキャリアについて考える」を開催しました。筒井氏からは、現在の働き方は1980年代に成熟した性別役割分業体制に一時的な両立支援を加えたものであり、共働きが上手くいかない状況にあることを講義して頂きました。男性的な働き方を緩和し、男女ともに「長時間労働なし、転勤なし」のキャリアを増やす必要があります。

2限は、3人の社会人にロールモデル、東森歩氏(ファン度レイジング・マーケティング代表)、植田恭平氏(高知市役所生活食品課)、川口真穂氏(漁師の食卓)にお話をして頂き、筒井先生とディスカッションをしました。

起業経験者の東森歩氏は、進路を決めるにあたって考えることとして、自分の価値や、自分の人生を自分の力で切り拓くことの大切さについて、お話して頂きました。

植田恭平氏からは育児休業を取得した経験談が語られました。子どもは親の思い通りにはならないし、何を考えているのか見当もつきません。けれども、多くの時間を子どもと触れ合うことによって、親が子どもを愛する気持ちに「実感をもって」気が付くことができたことが、一番良かった点でした。

河口真穂氏からは、漁師の家に生まれ育ち、多くの人たちとの出会いに導かれて、加工販売業者として起業するまでを話して頂きました。家業の手伝いをする中で、漁師の家の料理を再現したいと思い、男性ばかりの漁師に交じって、競り市で頑張っています。

3・4限は、これまでの授業を受けて考えた内容を学生がグループディスカッションを行いました。「パートナーと離れた土地で働かなければならないことが決まったとき」を想定して、男性、女性がそれぞれどのような選択肢をとるかをシュミレーションして、最後に各グループで話し合った結果を全体で共有しました。



■「男女共同参画社会を考える」男女共同参画推進室・学生スタッフからの感想

★1日目の認知症の話で実体験は想像しただけで辛い話だと思い、自分の周りでも起こりうるから、皆でのサポートが大事だと思った。2日目のデートDVは、男女の違いが昔から根深く残っていることで起こるのかなと感じた。3日目はキャリアの話で一番役立ったし、就活前に聞けたらもっとよかったかなと思った。今まで、あまりこういう話を聞く機会がなかったので、3日間、これからの役立つ話が聞けてよかった。

土佐さきがけプログラム 4年 西川 奈七

★私は男女共同参画ということに対してもっと理解を深め、今起きている男女間の不平等について考えたいという思いの下、学生スタッフをさせていただきました。スタッフとして働きながら講演を聴かせていただくことができ、ワーク・ライフ・バランスやデートDVなど、様々な視点から男女が共に社会を築くためのヒントを学ぶことができました。自分が考えたことの一つとして、「男らしさ、女らしさ」は知らず知らずの内に社会から求められ、時に押し付けられてしまっているから、そういう教育を受けた子どもが大きくなった時に何かしらの考え方の不調和をまねくのではないかということです。自分にとって有意義なワークスタディの経験となったことに感謝しています。

農林海洋科学部 2年 陶山 智美

■男女共同参画関連授業の紹介

■「ジェンダーを考える」

(共通教育科目) 森田 美佐 准教授



本授業では、受講生が、ジェンダー(社会的・文化的につくられた「男らしさ」「女らしさ」)について学びます。ジェンダーとは何なのか、なぜそのような「らしさ」が構築されたのか、「男らしさ」「女らしさ」は、私たちの生命・暮らし・人生に、どのような影響を及ぼすのか、他国はどのような状況か、自分らしい生き方を考えていくうえで、ジェンダーとどう向き合えばよいか…。このようなことを、労働、教育、政治、恋愛、結婚、家事、育児、介護等、日常的な領域で議論しています。

残念なことですが、日本には、まだジェンダーに対する“偏見”があると思います。「ジェンダーって、女性の地位を向上させようっていう、男性には関係ない勉強でしょ?」「性別は男と女だけだろう?」とぼんやり思っている人もいます。しかし女性の問題は男性の問題の裏返しです。女性の生きづらさは、男性の生きづらさと関係しています。また性の在り方だって様々です。この授業を受けて頂ければ分かります。

受講生が、ジェンダーに縛られずに自身の能力を存分に発揮できる社会(男女共同参画社会)の主役として、社会に羽ばたくことを願って授業をしています。

■「男女共同参画の哲学」

(人文社会科学部科目) 小島 優子 准教授



古代ギリシアの時代から、哲学では人間とは何か、男性であること、女性であることについて問われてきました。思想史の中で、マイノリティや人種、性別等多様な存在の公正さはどのように扱われてきたかを考えます。性差はあると言っても、ないと言っても、いずれにしても齟齬をきたします。なぜならば、一方ではあらゆる人は人間として平等の権利と自由を持っていますが、他方では生物学的な性差は存在するからです。

男女の公正さはどのように実現できるのでしょうか。この授業では、社会における公正さの実現だけでなく、文化的・歴史的に創られた性差を分析することによって解きほぐします。現代に生きる我々の問題を、古来思想家たちが考えてきた性差とは何か、公正さ、自由とは何かというテーマを通じて考え直すことを課題とします。

※職員の皆様にリーフレット「介護に備えちゅうかえ!」、「従業員の仕事と家庭の両立を支援しましょう」を配布します。
働きやすい職場環境づくりにお役立てください

〒780-8520 高知市曙町二丁目5番1号 高知大学男女共同参画推進室
TEL:088-888-8022 FAX:088-888-8023 E-MAIL: sankaku@kochi-u.ac.jp

